

4 事業開拓推進室の取り組み

データ管理の高度化をトータルにサポートする 新ブランド“ABLER™”でお客様のDXに貢献

NTTデータは2020年5月20日、より高度なデータ活用に向けデータの整備・分析・活用をトータルにサポートする新ブランド“ABLER™（エーブラー）”の創設と、ABLERブランドでのサービス提供開始を発表した。本稿ではその背景やABLERの特徴について紹介する。

多種多様なデータの経営資源化が 企業の課題に

インターネットが普及して以降、流通・蓄積されるデジタルデータは増加し続けている。特にリレーショナルデータベース（以下、RDB）での管理・活用に適さないことの多い写真、動画、音声、SNS投稿など、「非構造化データ」が飛躍的に増加している。また、企業内には構造化され、蓄積されていても活用に至っていないデータも多く存在する。デジタルトランスフォーメーション（DX）が進むなかこの傾向はますます強くなっており、これらの多種多様な未活用データを有効活用して経営資源化することが、競争力を高めたい企業にとっての重要課題となっている。

NTTデータは比較的早くから非構造化データの蓄積や多種多様なデータの統合・活用に力を入れており、その取り組みを通じて獲得した豊富なノウハウがABLERに活かされている。

データの民主化：誰でも簡単に データにアクセスし活用可能に

近年はビッグデータやAIなどの

最新技術を利用して高度なデータ分析を行うためのツールも多数登場している。そのためかつてはデータサイエンティストなど一部の専門家だけが行っていたデータ分析を誰でも行えるようにする「データ民主化」への注目が高まっている。ABLERもデータ民主化を強く意識してデザインされており、「誰でも簡単にデータにアクセス可能」にすることが重要なコンセプトの1つとなっている。

データを「ためる、探す、見せる」 から「分かる」までを実現

従来のデータ活用ではデータソースを調査し、インターフェースを定義してデータを収集・蓄積し、データクレンジングなどデータ分析の準備をするまでに多くの人手と時間を必要としていた。そのため「分析に注力できない」、「データの質・量・鮮度・精度が不足する」、「多大なコストがかかる」といった課題を抱えるお客様が少なくなかった。

ABLERブランドで提供する価値は、そうした課題を解決した上で「さ



株式会社 NTT データ
第四金融事業本部 事業開拓推進室
（左から）部長 佐久間 康久氏
主任 斉藤 綾子氏

まざまなデータを一元的に集約・統合し業務や部門ごとに必要に応じてデータを使用できる状態」すなわち「シングルビュー」を実現することだ。そしてデータを「ためる、探す、見せる」だけでなく機械自身がデータの意味を「分かる」まで実現することをサポートする。

あらゆるデータを 圧倒的なスピードで活用可能に

ABLERのもう1つの価値は、これらの作業を極力自動化し圧倒的なスピードで実行可能にすることで、お客様を地理的／時間的／コスト的な制約から解放し、分析に注力できる環境を作り出すという点にある。

「アドホック且つスピーディーな

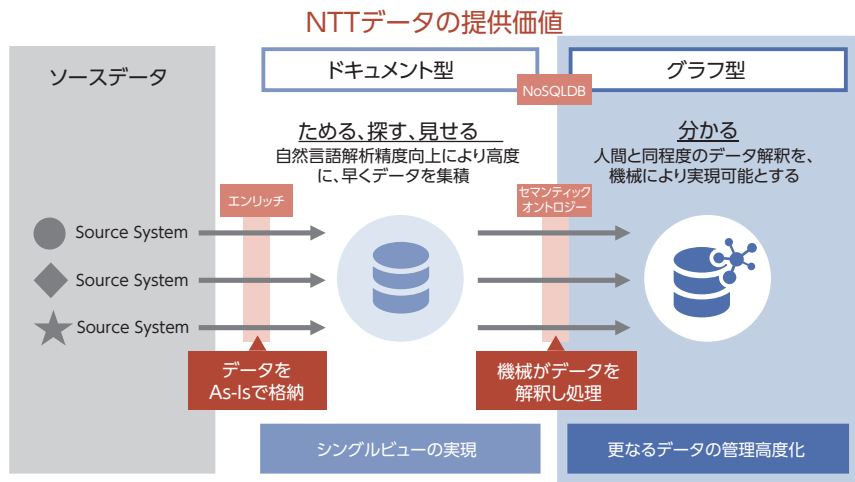


図1 ABLERのコンセプト

分析が可能になり、短期間に分析を繰り返して知見を得やすくなります。そしてその知見をもとにビジネス拡大に必要なアクションにつなげやすくなるといった効果を期待できます。」（齊藤氏）

ABLERを支える3つの要素技術

「あらゆるデータを圧倒的なスピードで活用可能に」する上で重要な役割を果たす要素技術が3つある。

多種多様なデータ活用を促進する「NoSQLデータベース」

データを表構造で保持するRDBは高速な処理が可能な代わりに事前のデータ構造定義が欠かせない。一方NoSQLデータベース（以下、NoSQLDB）は事前の定義が不要だ。どんなデータでもあるがままに蓄積し、使いたいデータだけを使いたい形に整形してすぐに使うことができる。そのため非構造化データの管理に適しており、またデータの追加・変更に強くアジャイル開発との相性が良い。

NTTデータはエンタープライズ

の要件に対応するNoSQLDBの活用を行っている。NoSQLDBはキー・バリュー型(KVS)、ドキュメント型、グラフ型に分類できるが、現在活用している一つは、ドキュメント型に加えグラフ型の機能を備えているMarkLogicだ。ドキュメント型DBはデータをXML構造で保持しXMLタグを事後的に追加できるため、ビジネスの変化に応じてコード標準化などを柔軟に実施できる。またグラフ型DBはデータセット間の関連付けに適しており、RDBでは多段のJOINが必要になるような複雑な関係を含むデータの問合せを容易に実行可能だ。例えば役職や部署、資格など多数のマスタを関連付け、社員ごとのデータを抽出するような作業を簡単な操作で実行できる。

「ためる、探す、見せる」を実現する高度な自然言語処理（エンリッチ）

データ内のワードに対して意味を付与する「エンリッチ技術」により、各ワードにラベルを付ける。例えば顧客コードと顧客名からなる顧客マスタがデータソースなら、顧客コード・顧客名だけでなく、顧客名を分

解して「姓」と「名」にラベルを付けることができる。表データだけでなく文章中のワードに意味を付けることも可能だ。用語辞書と表記ルールをお客様ごとにカスタマイズすることにより、汎用的な意味に加え業務固有の意味も付与する。

これにより前述の「ためる、探す、見せる」を素早く実現可能にする。

「分かる」を実現する

セマンティック／オントロジー

機械によるデータ解釈を可能にし、データ管理の速度を飛躍的に向上させるのがセマンティック技術だ。この技術により元のデータが持つ意味をコンピューターが理解し処理できる形の利用データ、すなわち「セマンティック」で表現する。このセマンティックと「人と人之间には親子関係が存在する」といった知識体系（オントロジー）を結びつけることにより、コンピューターで人間と同様のデータ解釈を可能にする。

オントロジーは世界各国で検証が進められている最先端の技術分野だ。NTTデータはお客様と共同で実データを使った研究を進めている。AIを活用してオントロジーを自律的に学習させるといった取り組みも進めており、この技術力がNTTデータの大きなアドバンテージとなっている。

データ収集・蓄積・活用の高度化をトータルにサポート

ABLERは前述の3つの要素技術だけでなく音声認識、自然言語処理、機械学習をはじめとするさまざまな技術を活用し、データ整備・データ分析活用業務のコンサルティングを

含めたフルサービスを提供する。お客様の課題解決に対して、どのようなデータをどのように収集し管理するか、どのように可視化・分析し知見を見出すかといったコンサルティングから、必要となるIT基盤/ツールの提供、さらにはデータ分析・活用業務までをトータルにサポートすることが大きな特長となっている。

既存システムとの連携にも柔軟に対応する。データ活用の取り組みは個別最適になりがちであり、個別最適で進めてきたが故に生じる課題もあるが、そうした課題の解決も可能だ。

「データ活用に関わったときの相談先として「ABLER」を活用してもらいたい。」(佐久間氏)

ABLERのソリューションラインナップ

現時点(2020年9月)で提供可能なABLERのソリューションを以下に紹介する。

Intelligent Data Fusion

データの解析、整備から統合、そして前述の「シングルビュー」の実現までを一気通貫でサポートする。

情報系やERPのシステム統合といったユースケースが想定されている。

iTreasure[®]

iTreasureについては「Intelligent Search」と「Intelligent Know Your 3rd Party」というデータの可視化をテーマとする2つのソリューションが提供されている。詳細は本特集「6. 高度情報管理ソリューション「iTreasure[®]」」で紹介する。

iCrawler[®]

インターネット上のWebサイトや社内の文書ファイルなど、社内外の多種多様なデータから知りたい情報を収集する。そして意味を解釈しタグ付けしてNoSQLDBに格納する。法人審査業務の飛躍的な効率化が可能であり、クレジットカード業界大手の多くが加盟店審査に活用している。また顧客に関する情報を一括表示し、営業活動を支援するといったユースケースもある。

Customer Engagement Hub[®]

音声、チャット、メールなどの顧客接点を通じて得られる情報を一元的に管理・分析可能にする。コールセンターにおいて通話内容をリアルタイムにテキスト表示する、FAQに

対する回答をサジェストする、といったユースケースがある。地銀など多くの金融機関で活用されている。

DataDiscovery[™]

NoSQLDBへのデータ格納から、格納した多種多様なデータのタグ付け、CSV形式への変換、データの論理的な意味を定義する辞書の作成など、データ活用に必要な作業をGUIベースで行うためのソリューションだ。NoSQLDBを操作するための専門知識は不要であり、データサイエンティストや技術者でなくてもNoSQLDBのデータを参照・活用することが可能だ。金融系に限らずさまざまな業界で活用されている。

新しい技術の登場など状況の変化に常に対応していく

ABLERを所管する事業開拓推進室は、多種多様なデータを経営資源化することの重要性やABLERが提供する価値、またユースケースについてオウンドメディア(<https://abler.nttdata.com/>)などを通じて情報発信している。また社内他組織とも連携しながらお客様に説明、提案する活動を進めている。データ活用への意識が高いお客様も多く、オウンドメディアを通じた問合せも増えているという。

「現在新たなソリューションの提供準備を進めており、その後も随時ソリューションを追加していく考えです。お客様のデータ活用への意欲は高まっています。新しい技術の登場など、常に最新の状況に対応しながらお客様のデータ活用をサポートしていく考えです。」(斉藤氏)

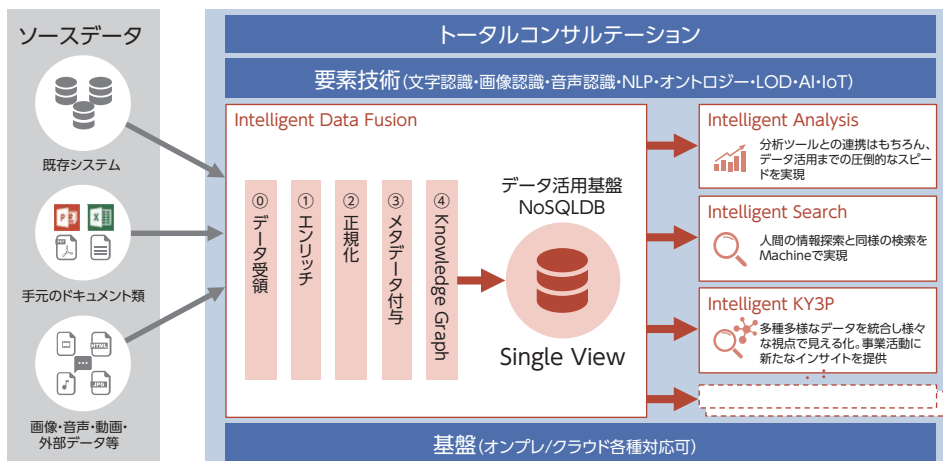


図2 ABLER全体像